

東日本大震災から約2カ月後、福島県中通り地方の三春町にいた小学校の教師たちは校歌の楽譜を探していた。三春町の小学校の楽譜ではない。東京電力福島第一原発事故の避難指示区域に入った三つの小学校の楽譜だった。

楽譜再現 避難先で演奏



三春町は、原発事故で故郷を追われた中通り地方の宮岡町や葛尾村の住民たちを受け入れていた。着の身着のまま逃れてきた子どもたちの学用品や入学式の服はどうしたらいいか。受け入れ先の町立三春小の教頭だった遠藤俊一さん(64)は「原発の状況はどうなっているのか、避難生活はいつまで続くのか、なにもかも分からない状況でした」と振り返る。

新学期が始まった2011年4月6日、三春小は、宮岡第一小(宮岡第三小)葛尾小から十数人の児童を迎え入れた。見知らぬ土地で、避難所から登下校する子どもたち。放射線による影響への不安がある中、外で思い切り遊ぶこともできない。必死に耐えようとしているのか、緊張した面持ちの子どももいた。泣きながら登校する子どももいた。

友の心つないだ校歌



福島第一原発事故により福島県宮岡町の住民が避難する体育館で演奏する山田樹樹さん(右から2人目)ら。福島県三春町で2011年6月6日(日本フィルハーモニー交響楽団提供)

「子どもたちのためになにかできることはないだろうか」。遠藤さんがそんな思いを抱いていたとき、日本フィルハーモニー交響楽団が町を訪れて演奏することが決まった。

新学期に入って1カ月がたとうとしていた頃だ。遠藤さんは日本フィルにお願ひしてみた。「校歌を演奏していただけませんか」。全校集会などで三春小の校歌を合唱する度、宮岡や葛尾の子どもたちはどんな気持ちなんだろう」と胸がつかえた。「原発事故さえなければ、歌っているはずだった校歌を三春でも歌うことがかなうのなら」。ふと頭に浮かび、口にしていった。「楽譜さえあれば喜んで」。日本フィルは快諾した。教師たちの楽譜探しが始まったのはそれからだ。「防護服を着て、私が学校

に取りに行きます」。浜通り地方から避難してきた教師は申し出た。覚えていた限り、譜面に書き起こします。

不完全ながらも3校の楽譜がそろった。教師たちの熱意に応え、日本フィルは急ピッチで校歌を複製四重奏用に編曲する作業に取りかかった。そして、演奏会当日の6月6日、三春小の体育館には、全校児童のほか、避難してきた大人たちも多く詰めかけた。ジブリアニメのテーマ曲などを披露し、三春小、そして、宮岡町、葛尾村の三つの小学校の校歌も演奏された。カルテットの響きに、子どもたちが歌声を乗せる。

「久しぶりに校歌を歌って、離れはなれなくなった。友だちを思い出した」。避難生活を送る子どもたちはそんな感想を寄せた。母校の校歌を口

ずさんだ大人たちも目を赤くしていた。「少しは音楽で元氣や希望を届けられたのかもしれない」。そう話すカルテットの一人でチェロ奏者の山田樹樹さん(52)は三春町出身だ。町に足を踏み入れたときは、緊張していた。被災地のためになにかしたいと思いつながら、「明日をどうなるか分からないのに、音楽どころではないだろう」と考えを巡らせていたからだ。

三春小を訪れる前、避難所となっていた町の体育館で演奏した。段ボールで仕切られ、あちこちに洗濯物が干してあった。「誰が聴いてくれるのだろう」。不安を募らせる中、出入り口のロビーで奏でると、20人ほどが集まった。涙を流して聴いてくれる人もいれば、「お茶、飲みませよ」ともてなしてくれる人もいた。

「演奏を喜んでもらうのが音楽家の本分。それは、被災地だろうとサントリーホールだろうと変わらない。そう思っていました。山田さんは振り返る。「海にまつわる曲はやめてほしい」「帰れない古里を思い出さず曲は避けてもらえないだろうか」。日本フィルは被災した人々の求めに応じ、心情に配慮しながら慎重に選曲した。

多いときには1日に4カ所を回って演奏した。複数の会場に何回も聴きに来てくれる被災者もいた。11年5月に訪れた宮城県では、夫を失いながらもずっと泣かずにいた女性が涙した。「2カ月の涙が出ました。女性はそう楽員に打ち明け、「おさん、もう少しこっちで頑張るね」と決意したという。「籠もっている人に外に出てきてもらいたかった。熱心に演奏会の案内をして回る宮城県内の仮設住宅の自治会長もいた。

しばらくすると、岩手県沿岸部を舞台にしたNHK連続テレビ小説「あまちゃん」のテーマ曲など海を連想させる曲も喜ばれるようになった。ピアノとバイオリンで大漁節を奏でれば、漁師から「そんなチャラチャラした感じじゃ船は動かん」と真剣な指導が入り、会場が一体となって盛り上がった。

当初は交通費などを日本フィルで賄っていたが、寄付金も集まるようになった。そして、活動は次第に届けるだけでなく、吹奏楽部の中高校生への指導、地元オーケストラとの合同演奏会での共演などの交流にも比重を置くようになっていく。それには、日本フィルの力だけでなく、被災者自身の協力も欠かせなかった。